



Title	地域社会成熟化にともなう新住宅市街地の計画・整備課題に関する研究
Author(s)	黄, 大田
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37912
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	黄 大 田
博士の専攻分野の名称	博 士 (工 学)
学位記番号	第 1 0 2 5 9 号
学位授与年月日	平成 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 工学研究科 建築工学専攻
学位論文名	地域社会成熟化にともなう新住宅市街地の計画・整備課題に関する研究
論文審査委員	(主査) 教 授 紙野 桂人 (副査) 教 授 岡田 光正 教 授 樽崎 正也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本における先導的大規模住宅市街地開発である大阪府千里ニュータウンを対象として、事業終了後、人口、住宅・住環境、購買施設等がどのように変動してきたかを考察するとともに、その遷移過程において発生する問題並びにそれらを左右する要因を明らかにし、地域社会の成熟化にともなう今後の住宅市街地開発の計画課題と整備方向について新たな知見を得ようとするもので、6章より構成されている。

第1章では、研究の目的、背景、意義及び研究の範囲について述べた。

第2章では、ニュータウンの人口構成の推移を把握した上で、居住者の高齢化に焦点を当て、その特性を明らかにするとともに、今後の高齢化傾向を予測した。

第3章では、ニュータウンに立地する各種住宅の変動状況を把握・考察するとともに、住宅変動にともなう住環境保全の課題について検討した。

第4章では、非計画的購買施設の発生状況などを把握・考察することによって計画的購買施設の問題点を洗い出し、ニュータウンにおける購買施設の計画・整備の課題を明らかにした。

第5章では、高齢者にとっての住環境問題を探り、高齢化に備えたニュータウンの住環境整備課題について検討した。

第6章では結論として、以上の研究成果をまとめた上で、今後の整備方向について提言するとともに、千里ニュータウンの経験が新住宅市街地の計画・整備にいかなる示唆を与えているかを考察した。

論文審査の結果の要旨

我が国における新住宅市街地、いわゆるニュータウンも、我が国最初の開発事例である千里ニュータウンの事業開始以来、すでに約30年を経過しているが、その住宅地としての遷移過程において様々な問題点を生じるようになった。本研究は我が国ニュータウンの中で最も成熟度の高い千里ニュータウンをとりあげ、人口、住宅・住環境、生活諸施設等多方面にわたる調査分析を行い、その実態ならびに問題点を明らかにすることにより、今後の新住宅市街地計画に対する計画課題と整備方向に関する指針を得ようとしたもので、その成果は次の通りである。

- (1) 人口構成の推移や高齢化の傾向を把握し、住宅種類によって高齢化傾向が異なることを明らかにするとともに、調査を通じてこの高齢化が益々進展することを予測している。
- (2) 集合住宅形式の各種公共賃貸住宅および分譲住宅の住戸改善や建て替え、ならびに戸建て住宅地の建て替えや増改築等の実態を明らかにし、居住水準向上と同時に住環境悪化の側面が存在することを示している。特に、戸建て住宅地における宅地の用途転用や高密度化の様相を示し、良好な住宅地保全方策の必要性を指摘している。
- (3) 施設配置の段階構成理論が、計画通り機能していないことを指摘するとともに、非計画的施設である露店の出店状況、経営状況、利用状況、等実態を明らかにし、近隣センター計画のあり方に提言している。
- (4) 歩行環境、高齢者の生活、生活諸施設の利用等の実態と問題点を明らかにし、高齢化が進行しているニュータウンを高齢者にとって住みよい住環境に整備していくための整備課題について検討している。
- (5) 以上の諸結果を総合して、千里ニュータウンにおける高齢化問題の緩和、住環境の保全、近隣センターの活性化ならびに高齢者のための住環境の整備、等について諸提案を行うとともに、今後の新住宅市街地計画・整備の方向に対しての留意点を示している。

以上の様に本論文は、新住宅市街地を計画・整備する上で重要な多くの知見を得ており、都市計画学、建築計画学に寄与する所が大きい。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。